



©2010 熊本県くまモン #K26254



第61回

九州地区高等学校PTA連合会大会

# がまだすばい、熊本大会

期日／平成29年6月15日(木)・16日(金)

会場／6月15日 ANAクラウンプラザホテル熊本ニュースカイ

6月16日 熊本県立劇場・熊本学園大学



主催 九州地区高等学校PTA連合会

共催 一般社団法人全国高等学校PTA連合会

主管 熊本県公立高等学校PTA連合会

後援 熊本県・熊本県教育委員会・熊本市・熊本市教育委員会

# がまだすばい熊本大会

## 第61回九州地区高等学校PTA連合会大会参加報告書

- 日 程 平成29年6月16日（金）9：15～15：40
- 会 場 熊本県立劇場ほか（熊本市）
- 参加者 近藤会長、名嶋副会長、宮崎副会長、江頭副会長、大山校長
- 内容等 概要等については、次のとおり。

### 【分科会・第一分科会】テーマ：青少年の健全育成とPTA活動

#### 1 概要等

佐賀県立牛津高等学校PTA、宮崎県立宮崎西高等学校・附属中学校PTA、鹿児島県立伊集院高等学校PTA及び熊本県立宇土中学校・宇土高等学校PTAの4PTAより事例発表（大会要項P15～28）があり、その後、質疑応答等によりテーマに対する認識を深めた。

#### 2 事例発表等に対する所感

##### （1）佐賀県立牛津高等学校PTA

同校は服飾デザイン科やフードデザイン科などがあり、生活産業を担う人材を育成する学校であり、県内広域から生徒が集まるため、直接的に活動しにくい保護者も多いことから、専門委員会等を設けず、活動できる役員を各クラスから3名選出し、負担感を減らして、可能な範囲で活動してある様子がうかがえた。

本校も、筑後地域だけでなく、佐賀県の一部など広域から通学しており、保護者の直接活動に対する考え方は参考になると感じた。

また、イレブン・セブン運動というモバイル端末を操作しない時間帯を徹底しようとする取組みを展開されており、最近では保護者自身もいわゆるスマホ依存になりがちな状況も見受けられることから、本校においても学校の中だけでな、家庭におけるモバイル端末の使用制限の具体的なルールを設けて、各家庭に示す取組みも必要ではないかと感じた。

##### （2）宮崎県立宮崎西高等学校・附属中学校PTA

同校は、宮崎県を代表する進学校であり、また、附属中学も含めてPTA活動が構成されているが、PTA総会と参加できなかった方のための再集会を合わせると例年90%を超える出席率があるなど、教育熱心な保護者が多いように感じられた。なお、役員会、理事会等を教職員の負担軽減（最終退庁時間が遅くならない配慮）のために、午後4時から開催しているとのことであったが、通学範囲が身近な小中学校ならともかく、一般の高校では難しいだろうと感じた。

活動では、進学校ならではの？の大学入試模擬試験学習会や父親委員会によるキャリア教育の一環で実施されるYUME講座が特徴的だと感じた。

(3) 鹿児島県立伊集院高等学校PTA

同校は、創立93年目を迎える薩摩半島中北部の伝統校で、県内の50を超える中学校から進学してきており、高校PTAと中学PTAが懇談の場を持つなど、中学校と連携しながら、地域に根差した活動を行っていることがユニークだと感じた。

また、保護者と生徒のコミュニケーションが円滑にできるように事業等を工夫しており、生徒のあいさつも非常に素晴らしいと報告されており、楽しそうな学校生活がイメージできた。

なお、保護者のPTA活動に対する認識向上の一環として、九Pや全P大会の報告書を全会員に配布するなどの取組みは、見習いたいと感じた。

(4) 熊本県立宇土中学校・宇土高等学校PTA

同校は、中高一貫校であり、PTAも6学年で構成されており、通常の高校より息の長い取り組みができていると感じた。

しかし、長く活動をしなければならぬと「負担感」や「やらされ感」が増える懸念があることから、同校PTAのモットーとして「出来るときに出来るしこ・100%Volunteer!」を掲げ、奉仕ではなく志願者によるPTA活動を実践されていた。具体的には、学校の除草作業やバザーのスタッフも「この指とまれ方式」で実施されており、当初の目論見を大幅に超える志願者により楽しく事業を実施されている。

6年にわたる学校との関わりだから、保護者と教職員の信頼関係を築き、子どもたちを育むための温かい土壌を、より多くのPとTの参画により作っていくために、楽しい事業や活動となるよう工夫し続けてあるPTA会長の熱意とパワーに元気をいただいた。



## 【全体会・記念講演】

1 演題 「若者の人生儀礼」

2 講師 東京大学名誉教授・熊本県立劇場館長 姜 尚中（カ・サンジュン）氏

3 記念講演の所感

熊本生まれで東京大学にて学ばれた講師の体験と江戸時代や明治の頃の若者の人生儀礼（通過儀礼）と現在における若者を取り巻く状況等を比較等しながら、若者が一人前に育っていくために、恩師や友人の存在がとても大切であることについて繰り返し語られた。

○コミュニケーションが苦手であった自分が学生時代に、まさに「薫陶」を受けた先生のおかげで今の自分があること。

⇒「薫陶」と呼べるような師との交わりが大切であること

○昔は元服などの通過儀礼により大人になる自覚をする機会があったが、現在ではそれが難しいこと。

⇒高校生など多感な時期における適切な大人の関わりが重要であること

○明治の夏目漱石と正岡子規など、ロールモデルが無い時代において「心友」の存在が大切であること。

⇒現在も先が見えない時代になってきており、少数で良いので心友と呼べる友達を作れるような高校であってほしいこと。

